

伊勢神宮崇敬会だより

# みもすそ

特集  
灯芯



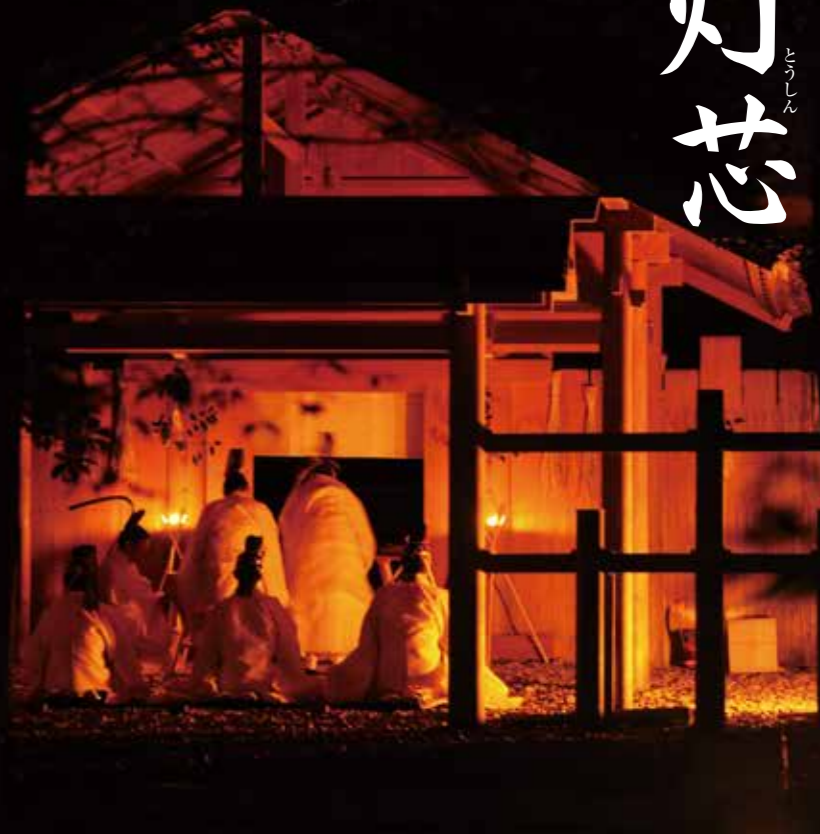
お伊勢さんの歳時記

- 4月3日 神武天皇祭遙拜
- 4月4日 神田下種祭
- 4月11日 大麻用材伐始祭
- 4月26日 植樹祭
- 4月28～30日 春の神楽祭
- 4月30日 大祓
- 5月1～3日 御即位奉祝神楽
- 5月1日 神御衣奉織始祭
- 5月13日 神御衣奉織鎮謝祭
- 5月14日 風日祈祭
- 神御衣祭
- 5月31日 大祓
- 6月1日 御酒殿祭
- 6月15～25日 月次祭
- 6月30日 大祓

内宮を流れる五十鈴川は、倭姫命が御裳を濯がれたことから「御裳濯川」(みもすがわ)とも雅称されます。題字は本会会長の松下正幸による浄書。表紙は、暗闇をほのかに照らす灯明。

第90号  
平成31年 春

# 灯芯とうしん



電灯が普及する以前まで  
人々の生活を照らす灯りは、火<sup>ヒ</sup>でした。  
灯芯とは、灯明や和ろうそくの燃え芯のこと。  
神宮をはじめ各地の社寺の伝統行事を支える  
灯芯の産地、奈良県安堵町を訪ね  
受け継がれてきた手技を見せていただきました。

浄間の祭儀で灯される灯明（荒祭宮神嘗祭由貴夕大御饗）。



灯芯を植物油に浸し火を灯す。芯が長いほど点灯時間が延び、束ねれば強火に。

電球が発明されるまで、人々は植物やその加工品を燃やして灯りにしてきました。屋外では庭火や篝火<sup>かがひ</sup>、松明<sup>たきまろ</sup>。屋内では奈良時代から植物の油を用いた灯明や和ろうそくが社寺を中心に。江戸時代に菜種油の製造が始まると、皿に油を入れ、そこに浸した灯芯に火をともし照明としました。

灯芯とは、蘭草<sup>いぐさ</sup>から取り出したズイ（髓）のこと。原料となる蘭草はイグサ科の多年草。別名トウシンソウともいい、畳表の原料とは種類が異なり、茎が太く、丈の短い品種です。

奈良県生駒郡安堵町では、江戸中期から昭和四十三年頃まで灯芯用の蘭草が栽培され、町の女性たちは農作業の合間に灯芯をひく（取り出す）仕事を担ってきました。

## 湿地を生かした冬の田植え

伊勢から車で約二時間。安堵町は、全国で三番目に小さい町で、世界最古の木

造建築で知られる法隆寺のすぐ東隣にあります。

町は大和川、富雄川<sup>とみお</sup>、岡崎川が合流する低湿地帯。ここに水田を拓いた先人たちは、水はけの悪い土壌を逆手にとって、米の裏作に湿地を好む蘭草を選んだのです。

「地の利を生かしたことに先人の深い洞察力を感じます。安堵町では稲刈りを終えた晩秋に蘭草を植えるので『冬の田植え』と言い、灯芯のことは『とうしみ』と呼んできました」

橋本紀美さんは、安堵町歴史民俗資料館の館長。町の歴史や伝統、民俗資料を展示する同館は、安堵町役場のすぐ近く。郷土の旧宅を活用した館内では、灯芯ひきを後世に伝えていくため、定期的に体験会事前申込制を開催しています。

高度経済成長期、電灯の普及や工場開発など様々な要因から、町では蘭草の生産が行われなくなりました。平成八年に「灯芯保存会」が発足。資料館前の水田で蘭草栽培を復活させ、灯芯ひきの技術を次世代に伝える活動を始めました。現在約四十名の会員を数えます。

## ひき台で蘭草の皮をむく

蘭草が灯芯になるには一年を要します。晩秋、田に植えられた苗は水中で冬を越し、春から分蘖<sup>ぶんげつ</sup>して株が成育し、七月上旬に収穫を迎えます。梅雨の晴れ間をねらって鎌で刈り取り、川原の土手に広げて天日で乾燥させます。翌日から三



ひき台の刃で蘭草の外皮をひき裂き、乳白色のズイを取り出す。



安堵町内の橋には、郷土の文化を伝えようと、灯芯をひく女性のレリーフがはめられている。



ズイを抜いた後の藁皮も再利用。灯芯保存会の皆さんが制作した蘭草飾り。資料館で一部販売も。



灯明を灯して、鍋の蓋のような部分に墨の原料となる油煙墨を採集する道具。

角錐状の束に立ててさらに乾燥をうながし、カラカラに乾いたら新藁の出来上がり。冷暗所で保管し、必要に応じて灯芯をひきます。

「ひく前日から水にうませ(浸し)て柔らかく戻しておきます」

町職員の方が灯芯ひきを実演してくれました。専用のひき台に付けられた水平の刃に、直径三ミリほどの藁草の穂先を一本ずつ突き刺し、左手でずれないよう押さえながら右手をすつと引くと、小気味いい音とともに、乳白色のそうめんのようなズイが飛び出しました。

ズイはやわらかいスポンジ状で、その毛細管現象によって油を吸い上げ、炎を燃焼させる灯芯として用いられてきました。単純な作業に見えて、一メートル近いズイを切らずにひき出すには高い技術と根気が必要です。保存会の中でも、長灯芯の束をまとめられるのは数名とか。祖母や母の特技を見よう見まねで手伝わったことのある八十代、七十代の方の経験が貴重な財産となっています。

### 奈良墨や和ろうそくの原料にも

照明としての需要が少なくなった現在でも、灯芯は日本の特産品や伝統行事を支えています。

たとえば、奈良の特産品である墨。奈良墨は八〇六年、空海が唐から筆とともに墨の製法を持ち帰ったとされ、伝統を守る工房では、昔ながらに灯明皿に灯芯を置いて油を燃やし、蓋に付いた煤を集

めて膠を混ぜ製墨します。

灯芯は和ろうそくにも使われています。町内の中川商店では、竹串に和紙と灯芯を巻き付け、真綿をからめた棒状の芯を作っています。この芯にハゼの実の油を何度もうがけしたものが、和ろうそくです。

茶道の「夜咄の茶事」でも灯芯の灯りは欠かせません。冬の夕暮れどきから行われる茶事で、長灯芯をともして、主人が客をもてなします。長灯芯には「灯りが消える心配がありませんから、どうぞゆつくりおくつろぎください」というメッセージが込められています。

保存会の地道な広報活動が実を結び、現在では、東大寺の二月堂修二会(お水取り)、元興寺の地藏盆、春日大社、法隆寺など名だたる寺社の伝統行事に安堵町の灯芯が使われています。平成二十七年には、灯芯ひき技術が、町の無形民俗文化財に指定されました。

「町の小学校では、郷土学習の時間に灯芯ひきを体験します。また、資料館では夏休み期間、子どもたちを対象とした灯芯ひき教室を開催しています。その中から将来のひき手が育ってくれたら」と橋本館長は夢を語ります。

### 身近な植物資源を活かす

闇をおそれるあまり、人類は原始的な灯火具からガス灯、電灯と、昼さながらの明るさを求めて進化を続けてきました。エジソンが白熱電灯を完成させたの

### 藁草が灯芯の原料となるまで



灯芯用の藁草は、初冬に水田に植えられる。苗のまま越冬し、春以降に大きく育つ。



刈り取りは6月~7月上旬。1メートル前後に成長した藁草を鎌で一束ずつ刈っていく。



草の上を広げて天日干しにした藁草を、「人形たて」にしてさらに乾燥させる。



奈良薬師寺の最大の行事の一つ、修二会の灯明にも安堵町の灯芯が用いられている。



安堵町歴史民俗資料館の灯芯展示室。



旧家を修復し、町の歴史資料を展示する安堵町歴史民俗資料館。橋本館長(右)と上田学芸員。

安堵町歴史民俗資料館 生駒郡安堵町大字東安堵1322  
 TEL.0743-57-5090  
 午前9時から午後5時まで(入館は午後4時)  
 観覧料 大人200円 大・高生100円 小・中生50円  
 休館日 火曜

は一八七八年。わずか百年ほどの間に、日本古来の灯りの記憶が失われつつあります。

資料館の展示パネルに「灯芯用のいぐさは捨てるところがない」と書かれました。灯芯をひいて残った藺皮を、昔の人々は昆布巻や菓子、編み笠のひもに、紙や土壁の材料にもして、あまねく使い切っていたといえます。

神宮の夜のおまつりには松明や篝火、灯明が使われます。二十年に一度の式年遷宮では、新殿を汚さないように、油煙が少量の椿油に灯芯を浸し、照明としました。身近にある植物資源を無駄なく活用し、知恵と創意工夫を重ねてきた日本文化の精神を、神宮のおまつりや営みから感じとっていただければと願います。

春のお伊勢参りシーズン、少し寄り道して、灯芯のふるさと安堵町へ立ち寄りたてはいかがでしょうか。